

令和 6 年 5 月 25 日現在

機関番号：35404

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K03083

研究課題名（和文）いじめ抑止のメカニズム：モラルエージェンシーの活性化は傍観行動の低減につながるか

研究課題名（英文）Mechanism of deterring bullying: Does activation of moral agency lead to a reduction in bystander behaviors?

研究代表者

西野 泰代（Nishino, Yasuyo）

広島修道大学・健康科学部・教授

研究者番号：40610530

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：いじめが起きる場面で、その場にいる子どもたちはそれぞれにその状況を見定め、自分がどう行動すべきか葛藤しながら自らの行動を選択すると考えられる。どう行動すべきかについて心理的葛藤が生じて、モラルエージェンシーが活性化される状況であれば、子どもたちはいじめに加担したり見て見ぬふりをしたりすることをせず、被害者を助けるような行動を選択するだろうと予測される。小中学生を対象とした大規模調査の結果から、いじめ場面では多様な傍観や仲裁の様態が存在しうること、『道徳的理由』よりも『自己防衛的理由』が行動選択に大きく関与しうること、規律正しい学級では傍観が起こりにくく、仲裁が起きやすい可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、いじめ場面での傍観者は「見て見ぬふりをするもの」として一様に扱われてきたが、本研究の結果から、傍観には、他者への無関心さ、自分が被害者になることへの恐れ、集団への同調などさまざまな背景があり、多様な傍観様態が存在する可能性が明らかにされた。これにより、「さまざまな理由で生じる多様な様態を示す行動」として傍観を捉え直したうえで様態別の対応が必要であることが示唆され、たとえば、周囲に同調しやすい子どもに対して、学級内に傍観を許さないルールや空気を作るといった学級づくりを通じた間接的な介入をするなど、いじめの重篤化を防ぐための傍観者低減対策のひとつとして有効な示唆を提供できたといえよう。

研究成果の概要（英文）：When bullying occurs, each child will make sure of the situation individually and choose his (or her) own actions while struggling with how to act. Even when psychological conflicts arise about how to act, if children are in a situation where their moral agency is activated, they will not be complicit in bullying or turn a blind eye; It is predicted that people will choose actions that help victims. The results of a large-scale survey targeting elementary and junior high school students show that there can be various forms of bystander and defender in bullying situations, and that “self-protective reasons” may be more involved in behavioral choices than “moral reasons”. This suggests that in well-disciplined classrooms, spectatorship is less likely to occur and arbitration is more likely to occur.

研究分野：教育心理学

キーワード：いじめ 傍観 小中学生 モラルエージェンシー 同調傾向 共感的関心 いじめに対する教師の呼応性

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

いじめによる生徒の自死など「いじめの重大事案」が後を絶たず、いじめを予防する取り組みは学校現場だけでなく、家庭や地域、社会をも巻き込んだ重要な課題となっている。海外では、いじめ場面において傍観者がいじめを促すような行動を多くとる学級でいじめが頻発し、周囲にいる者たちが被害者を助けようとする傾向にある学級でいじめがそれほど起こらないといった実証研究などが報告され(Salmivalli, Voeten, & Poskiparta, 2011)、傍観者低減を目指した介入プログラムが実施されている。しかしながら、プログラムの多くで報告される介入の効果はさほど大きくなく、その理由としていじめの複雑なダイナミクスに関する理解の不足を挙げる研究もある(Guerra, Williams, & Sadek, 2011)。また、学校での介入のほとんどが教師によるものであるが、多くは教師の経験則に基づいておこなわれており、教師がいじめの現象についてもっと知ることにより良い介入ができるとの指摘もある(Newman-Carlson & Horne, 2004; Smith, 2011)。こうしてみると、いじめという現象のダイナミクスを解き明かし、介入を実践する教師がそのダイナミクスを理解することで、より効果の高い介入が期待できるのではないかと推察される。

いじめ研究において、近年、いじめ場面での傍観者に注目が集まるなかで、傍観者低減を目指した介入プログラムの効果を報告する実践研究(Kärnä, Voeten, Little, Poskiparta, Kaljonen & Salmivalli, 2011)などは散見されるものの、傍観行動がどのように生起するのかというプロセスについての研究は国内外においてほとんどみられない。一方、多くの子どもがいじめに対して否定的な考えを持ちながら、実際のいじめ場面で被害者を助けようとする子どもは稀だったという報告(Rigby & Johnson, 2006)がある。いじめが起きる場面で、その場にいる子どもたちはそれぞれにその状況を見定め、自分がどう行動すべきか葛藤しながら自らの行動を選択する(Thornberg, 2010)と考えられる。行動選択における心理的葛藤が生じて、モラルエージェンシー (moral agency) が活性化する方向に進めば、子どもたちがいじめに加担したり、見て見ぬふりをしたりせず、被害者を助けるような行動を選択するのではないだろうか。モラルエージェンシーとは慈悲深いふるまいをする力の作用を指す (Bandura, 2002)。これらのことから、子どもの周囲には個人の内的自己制御の機能を一時的に抑止させるような状況要因が存在し、それらの要因が個人変数と複雑に絡み合っただけで傍観行動を生起させる可能性が推測される。

【引用文献】

Bandura, A. (2002). Selective moral disengagement in the exercise of moral agency. *Journal of Moral Education*, 31, 101-119.; Guerra, N.G., Williams, K.R., & Sadek, S. (2011). Understanding bullying and victimization during childhood and adolescence: A mixed methods study. *Child Development*, 82, 295-310.; Kärnä, A., Voeten, M., Little, T., Poskiparta, E., Kaljonen, A., & Salmivalli, C. (2011). A large-scale evaluation of the KiVa anti-bullying program; Grades 4-6. *Child Development*, 82, 311-330.; Newman-Carlson, D., & Horne, A.M. (2004). Bully Busters: A Psychoeducational Intervention for Reducing Bullying Behavior in Middle School Students. *Journal of Counseling & Development*, 82, 259-267.; Rigby, K., & Johnson, B. (2006). Expressed readiness of Australian schoolchildren to act as bystanders in support of children who are being bullied. *Educational Psychology*, 26, 425-440.; Salmivalli, C., Voeten, M., & Poskiparta, E. (2011). Bystanders matter: Associations between reinforcing, defending, and the frequency of bullying behavior in classrooms. *Journal of Clinical Child & Adolescent Psychology*, 40, 668-676.; Smith, P.K. (2011). Why interventions to reduce bullying and violence in schools may (or may not) succeed: Comments on this special section. *International Journal of Behavioral Development*, 35, 419-423.; Thornberg, R. (2010). A Student in Distress: Moral Frames and Bystander Behavior in School. *The Elementary School Journal*, 110, 585-608.

2. 研究の目的

本研究は、道徳意識を持ちながらも、いじめに加担したり、見て見ぬふりをしたりする子どもの行動の背景にある心理的葛藤プロセスに注目し、マイクロ(個人)とマクロ(集団・状況)の両面から、いじめ場面における傍観者、いじめ被害者を助けようと行動する仲裁者、それぞれの行動が生起する心理的プロセスの道筋を探ることを目的とするものであり、いじめに対する効果の高い予防や介入に資する知見を提供することを目指すものである。

3. 研究の方法

Mixed Method を用いた検討 従来のいじめに関する研究は質問紙調査により子どもたちのいじめ経験や仲間関係を数量的に測定しようとするものがほとんどであったが、当事者がその現象をどう捉えているかという視点が欠落するなど、そこから推測できるものには限界があった。そこで本研究では、量的データと質的データを組み合わせた混合研究方法(mixed method)を用いることで、これまで捉えきれなかった複雑ないじめ現象のダイナミクスを明らかにすることを試みた。

1) 量的データの収集: いじめ場面でのモラルエージェンシーの活性化を個人と文脈の相互作用から明らかにするため、小中学生(小学4年～中学3年)を対象に、およそ3600名(各学年600名ほど)から質問紙調査による量的データを収集した。質問紙の構成は、「場面想定法」を用いて設定した2場面における行動の選択と各場面での罪悪感について、被害者および加害者との関係(それぞれ、友人か否か)、その場での傍観者の存在の有無により作成された12パターンのうちのいずれかで回答を求めるものであった。また、場面想定による質問に加えて、そのような場面での類似した経験をこれまでに体験したかどうかについても回答を求め、「態度」だけでなく「経験」についてもたずねた。加えて、質問紙では、いじめに特化したモラルディスエンゲージメント(道徳不活性)、友人関係の持ち方、ピアプレッシャーへの敏感さといった個人特性に関する項目への回答も併せて求めた。

2) 質的データの収集:

いじめにかかわる事例について、「どのような取り組みがどのような子どもたち(の状況)に功を奏したのか」を明らかにするため、小中高と多様な学校種、および特別支援教育に携わる教師たちからの自由記述による回答により質的データを収集した。

4. 研究成果

1) いじめ場面における傍観と仲裁の多様な様態:

「場面想定法」を用いて設定した2つの場面における行動の選択について回答を求めた質問紙調査の結果から、『いじめ場面で無力感を抱く傍観者』と『無関心な傍観者』、『いじめを止めようとする直接的仲裁者』および『被害者に寄り添おうとする間接的仲裁者』の存在が見いだされた。このように、いじめが起きている場面では、「見て見ぬふりをする傍観者」だけでなく、他の要因との関連から、多様な傍観様態および仲裁様態が存在しうる事が推察された。

2) 多様な傍観様態とかかわる要因:

(a) 「いじめはあってもしかたない」という子どもたちには、共感的関心(悲しんでいる人を見ると慰めてあげたくなる、というような特性)が低く、「モラルディスエンゲージメント(moral disengagement)」が高い、という特徴が見られた。「モラルディスエンゲージメント」とは、有害な、あるいは、攻撃的な行動をする際に、自己制御が働かないことにより、自分で自分を正当化することを指す(たとえば、「人に迷惑をかけるような人は、仲間はずれにされてもしかたない」というように考えること)。

(b) 「いじめに気づかなかった」という子どもたちのなかには、本当に「気づかなかった」子たちのほかに「気づかなかったふりをしている」子どもたちも一定数含まれている可能性が示唆された。「気づかないふり」をする子たちは、いじめに気づいていても「周りのみんなと同じで、自分はいじめとは思わなかった」というような「自己正当化」をする状況がうかがえた。

(c) 「何もせず見ているだけ」という子どもたちは、男子より、女子に多く、また、共感的関心が低く、周囲に同調しやすい、という特徴が見られた。さらに、他の子どもたちと比べて、学級への満足感が低く、学級で自分らしく居られず、自己評価が低い、などネガティブな心理状態が見られた。ここから、周りを気にして周囲に合わせて見て見ぬふりをする状態像が推測される。

(d) 「助けるべきと思うが、何もできず見ているだけ」という子どもたちも同様に、男子より、女子に多く、また、共感的関心が低く、周囲に同調しやすい、という特徴が見られた。ただし、「被害者を助けよう」と仲裁する子どもたちに比べると、学級への満足感や学級で自分らしく居られる感覚の得点は低かったものの、「何もせず見ているだけ」の子どもたちほどネガティブな心理状態ではないことが示された。

(e) その他、いじめを目撃した際に子どもたちにとって最優先されるのは「自分に被害が及ぶのは嫌」「かかわりたくない」といった『自己防衛的理由』であり、人として正しいことかどうかというような『道徳的理由』よりも『自己防衛的理由』が行動決定に大きく関与している可能性が示唆された。

3) いじめ場面における傍観と仲裁の生起を調整する学級要因：

多様な傍観と仲裁の各様態について、教師の関わりや学級内での規範意識の浸透とどう関連するかについて検討した。なお、教師の関わりについては、いじめに対する教師の呼応性（「先生は、いじめられた私のつらさや悲しさを理解できるだろう」「先生は、いじめで相談したことを真剣に扱ってくれるだろう」など）を指標とした。その結果、学級で守るべき規則がはっきりと示されているなど規律正しい学級では傍観が起こりにくく、仲裁が起きやすい可能性が示唆された。一方、いじめに対する教師の呼応性は、仲裁や傍観の様態の違いにより効果が異なる可能性が明らかにされた。

4) いじめ場面における傍観と仲裁に関する発達の差異：

傍観について、小学生では 攻撃形態(身体的攻撃 or 関係性攻撃)による有意な違いはみられなかった一方、中学生では関係性攻撃に対してより傍観しやすいことが示唆された。さらに、仲裁について、傍観同様、小学生では攻撃形態による違いがほぼみられなかった一方、中学生では関係性攻撃に対する仲裁行動が有意に抑制されやすいことが示唆された。

次に、教師との関係における仲裁行動について、いじめ場面に遭遇した際、教師に援助を求める行動(「すぐに職員室へ行って先生に伝える」など)は、場面(身体的攻撃 or 関係性攻撃)の違いによらず中学生で起きにくいこと、小中学生ともに場面の違いによらず自己防衛的理由得点が高くなるほど教師に援助を求めなくなるが、その程度は小学生の方が大きいことが示された。

加えて、いじめを目撃した際に「見て見ぬふりをする」傍観が起きやすい学級とそうでない学級の違いについて、小学生では、学級内で傍観経験の程度に類似性がある一方、その程度は学級によって違いがあることが示唆された。一方、中学生では、「傍観も仕方ない」という認知的正当化は学級の影響を受けて生起するものの、その後、実際に傍観するか否かは直接的に関連しないことが推察された。

5) 主な論文および発表について：

【学術論文】

- Nishino Yasuyo & Wakamoto Junko (2022). Various aspects of bystander behavior in bullying situations among Japanese elementary and junior high school students. *The Japanese journal of psychology*, 93, 21-31.
- 若本純子・西野泰代(2020). 仮想場面を用いた小学生・中学生のいじめ認知の検討—子どもは本当にその場面をいじめと捉えているのか— 生徒指導学研究, 19, 44-54.
- 若本純子・西野泰代(2021). 教師の萌芽段階のいじめ認知といじめの深刻化の認知の検討—重大事態等の防止のために— 生徒指導学研究, 20, 80-90.
- 【学会発表】
- 西野泰代 (2018). 子どもたちはなぜいじめ場面で傍観するのか: ピアプレッシャーへの感受性を規定する要因 日本教育心理学会第 60 回総会ポスター発表
- 西野泰代 (2018). モラルエージェントの活性化は「ネットいじめ」を低減するか 日本教育心理学会第 60 回総会シンポジウム話題提供
- Yasuyo Nishino (2018). Bystanders' reactions to bullying: The role of moral disengagement and perceived peer pressure. Poster Presentation at 25th International Society for the Study of Behavioral Development
- Yasuyo Nishino (2018). What Can Be Done about School Bullying? One Application of School-wide Positive Behavior Interventions. Poster Presentation at International School Psychology Association 2018
- Yasuyo Nishino (2019). The Role of Individual Correlates and Classroom Climate in Passive Bystanding Behavior in Bullying: A Multilevel Analysis. Poster Presentation at ECP 2019 (16th European Congress of Psychology)
- Yasuyo Nishino (2021). Multilevel Study of Bystanders in Bullying: The role of Perceived Peer Pressure and Teacher's Responsiveness. Poster Presentation at The 32nd International Congress of Psychology
- 西野泰代 (2022). 児童生徒の援助要請コーピングと学級風土がいじめ場面での仲裁行動の生起に及ぼす影響 日本教育心理学会第 64 回総会ポスター発表
- 西野泰代 (2023). いじめ場面で仲裁するか傍観するか 一同調傾向, 共感的視点取得, モラルディストレスの役割— 日本心理学会第 87 回大会ポスター発表
- 西野泰代 (2023). いじめ場面での仲裁と傍観に対する同調傾向の役割について 日本発達心理学会第 34 回大会ポスター発表
- 西野泰代 (2023). いじめに対する教師の呼応性といじめ場面での仲裁・傍観との関連 日本教育心理学会第 65 回総会ポスター発表
- 西野泰代 (2024). いじめ場面での仲裁と傍観—学級変数との関連について学校段階差による検討— 日本発達心理学会第 35 回大会ポスター発表
- Nishino, Y., Kanetsuna, T., & Toda, Y. (2019). Does the bully/victim ratio comparison help us clarify the seriousness of bullying in a class? Oral Presentation at WABF 2019 (World Anti-Bullying Forum)
- 西野泰代・若本純子(2019). 小中学生におけるいじめとモラルディスエンゲージメントとの関連 (1)いじめ場面での傍観行動とモラルディスエンゲージメント 日本発達心理学会第 30 回大会ポスター発表
- 西野泰代・若本純子(2020). 小学生・中学生のいじめにおける周辺の役割の諸相 (1) —子どもたちの理由づけから予測する多様な傍観様態— 日本教育心理学会第 62 回総会ポスター発表
- 西野泰代・若本純子(2020). 小学生・中学生の友人関係といじめ傍観行動をめぐる『現実』(2) 友人に対する同調の低減と共感の向上はいじめ抑止につながるか? 日本発達心理学会第 31 回大会ポスター発表
- 西野泰代・若本純子(2021). 小学生・中学生のいじめにおける周辺の役割の諸相 (3) —理由づけとデモグラフィック変数から説明する仲裁行動— 日本教育心理学会第 63 回総会ポスター発表
- 西野泰代・若本純子(2022). 小学生・中学生のいじめ傍観は同調から生じているのか—理由が異なる 3 様態の傍観を用いた検討— 日本発達心理学会第 33 回大会ポスター発表
- 西野泰代・若本純子(2022). 小学生・中学生のいじめにおける周辺の役割の諸相 (4)—加害者・被害者・傍観者との関係性と共感が傍観・仲裁に及ぼす影響— 日本教育心理学会第 64 回総会ポスター発表
- 若本純子・西野泰代(2019). 小中学生におけるいじめとモラルディスエンゲージメントとの関連(2) いじめ行為の繰り返しといじめ認知との関連にモラルディスエンゲージメントが及ぼす影響 日本発達心理学会第 30 回大会ポスター発表
- 若本純子・西野泰代(2020). 小学生・中学生のいじめにおける周辺の役割の諸相 (2) —攻撃形態と属性との交互作用による検討— 日本教育心理学会第 62 回総会ポスター発表
- 若本純子・西野泰代(2020). 小学生・中学生の友人関係といじめ傍観行動をめぐる『現実』(1) 「やさしい」友人関係は低年齢層へ広がっているか? 日本発達心理学会第 31 回大会ポスター発表

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Nishino Yasuyo, Wakamoto Junko	4. 巻 93
2. 論文標題 Various aspects of bystander behavior in bullying situations among Japanese elementary and junior high school students	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 The Japanese journal of psychology	6. 最初と最後の頁 21～31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4992/jjpsy.93.20050	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 若本純子・西野泰代	4. 巻 20
2. 論文標題 教師の萌芽段階のいじめ認知といじめの深刻化の認知の検討 重大事態等の防止のためにー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 生徒指導学研究	6. 最初と最後の頁 80-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 若本純子・西野泰代	4. 巻 19
2. 論文標題 仮想場面を用いた小学生・中学生のいじめ認知の検討 子どもは本当にその場面をいじめと捉えているのか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 生徒指導学研究	6. 最初と最後の頁 44-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 西野泰代	4. 巻 72
2. 論文標題 気持ちを言葉にできない子ども：すぐ手がでてしまう子	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 児童心理	6. 最初と最後の頁 53-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計27件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 西野泰代
2. 発表標題 児童生徒の援助要請コーピングと学級風土がいじめ場面での仲裁行動の生起に及ぼす影響
3. 学会等名 日本教育心理学会第 64 回総会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 若本純子・西野泰代
2. 発表標題 小学生・中学生のいじめにおける周縁的役割の諸相 (4)－加害者・被害者・傍観者との関係性と共感が傍観・仲裁に及ぼす影響－
3. 学会等名 日本教育心理学会第 64 回総会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 西野泰代
2. 発表標題 いじめ場面での仲裁と傍観に対する同調傾向の役割について
3. 学会等名 日本発達心理学会第34回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 西野泰代
2. 発表標題 いじめ免疫がクラスのいじめ蔓延度の変化を予測するか 2時点データを用いた検討
3. 学会等名 日本教育心理学会第 63 回総会(シンポジウム話題提供)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yasuyo Nishino
2. 発表標題 Multilevel Study of Bystanders in Bullying: The role of Perceived Peer Pressure and Teacher ' s Responsiveness.
3. 学会等名 Poster Presentation at The 32nd International Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西野泰代・若本純子
2. 発表標題 小学生・中学生のいじめにおける周边的役割の諸相(3) 理由づけとデモグラフィック変数から説明する仲裁行動
3. 学会等名 日本教育心理学会第63回総会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西野泰代・若本純子
2. 発表標題 小学生・中学生のいじめ傍観は同調から生じているのかー理由が異なる3様態の傍観を用いた検討
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 若本純子・西野泰代
2. 発表標題 小学生・中学生の友人関係といじめ傍観行動をめぐる『現実』(1) やさしい」友人関係は低年齢層へ広がっているか?
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 西野泰代・若本純子
2. 発表標題 小学生・中学生の友人関係といじめ傍観行動をめぐる『現実』(2) 友人に対する同調の低減と共感の向上はいじめ抑止につながるか？
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 西野泰代・若本純子
2. 発表標題 小学生・中学生のいじめにおける周縁的役割の諸相(1) 子どもたちの理由づけから予測する多様な傍観様態
3. 学会等名 日本教育心理学会第62回総会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 若本純子・西野泰代
2. 発表標題 小学生・中学生のいじめにおける周縁的役割の諸相(2) 攻撃形態と属性との交互作用による検討
3. 学会等名 日本教育心理学会第62回総会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 若本純子・原田恵理子・西野泰代
2. 発表標題 青年期男女の「両価的友人関係」と高配慮行動との関連 知覚されたピアプレッシャーを媒介変数とするモデルの検証
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Nishino, Y., Kanetsuna, T., & Toda, Y.
2. 発表標題 Does the bully/victim ratio comparison help us clarify the seriousness of bullying in a class?
3. 学会等名 WABF 2019 (World Anti-Bullying Forum) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yasuyo Nishino
2. 発表標題 The Role of Individual Correlates and Classroom Climate in Passive Bystanding Behavior in Bullying: A Multilevel Analysis
3. 学会等名 ECP 2019 (16th European Congress of Psychology) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西野泰代・原田恵理子・若本純子
2. 発表標題 高校生・大学生のいじめ場面での傍観行動を規定する要因(1) 従来型いじめ場面の検討
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 若本純子・原田恵理子・西野泰代
2. 発表標題 高校生・大学生のいじめ場面での傍観行動を規定する要因(2) LINE コミュニケーション場面の検討
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西野泰代・若本純子
2. 発表標題 小学生・中学生の友人関係といじめ傍観行動をめぐる『現実』(2) 友人に対する同調の低減と共感の向上はいじめ抑止につながるか?
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 若本純子・西野泰代
2. 発表標題 小学生・中学生の友人関係といじめ傍観行動をめぐる『現実』(1) 「やさしい」友人関係は低年齢層へ広がっているか?
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yasuyo Nishino
2. 発表標題 Bystanders' reactions to bullying: The role of moral disengagement and perceived peer pressure
3. 学会等名 25th International Society for the Study of Behavioral Development (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yasuyo Nishino
2. 発表標題 What Can Be Done about School Bullying? One Application of School-wide Positive Behavior Interventions
3. 学会等名 International School Psychology Association 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 西野泰代
2. 発表標題 子どもたちはなぜいじめ場面で傍観するのか： ヒアプレッシャーへの敏感さを規定する要因
3. 学会等名 教育心理学会第60回総会ポスター発表
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 西野泰代
2. 発表標題 モラルエージェントの活性化は「ネットいじめ」を低減するか
3. 学会等名 教育心理学会第60回総会シンポジウム話題提供
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 西野泰代・若本純子
2. 発表標題 小中学生におけるいじめとモラルディスエンゲージメントとの関連 (1)いじめ場面での傍観行動とモラルディスエンゲージメント
3. 学会等名 発達心理学会第30回大会ポスター発表
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 若本純子・西野泰代
2. 発表標題 小中学生におけるいじめとモラルディスエンゲージメントとの関連(2) いじめ行為の繰り返しといじめ認知との関連にモラルディスエンゲージメントが及ぼす影響
3. 学会等名 発達心理学会第30回大会ポスター発表
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西野泰代
2. 発表標題 いじめに対する教師の呼応性といじめ場面での仲裁・傍観との関連
3. 学会等名 日本教育心理学会第65回総会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 西野泰代
2. 発表標題 いじめ場面で仲裁するか傍観するか 一同調傾向, 共感的視点取得, モラルディストレスの役割ー
3. 学会等名 日本心理学会第87回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 西野泰代
2. 発表標題 いじめ場面での仲裁と傍観 ー学級変数との関連について学校段階差による検討ー
3. 学会等名 日本発達心理学会第35回大会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 渡辺 弥生、西野 泰代	4. 発行年 2020年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 236
3. 書名 ひと目でわかる発達	

1. 著者名 西野泰代、原田恵理子、若本純子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 120
3. 書名 情報モラル教育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	若本 純子 (Wakamoto Junko) (60410198)	山梨大学・大学院総合研究部・教授 (13501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------